様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１６４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２７２８

研究課題名（和文）空海撰述書を中心とする仏教関連資料の訓読と和訓に関わる研究

研究課題名（英文）The study of Kundoku and Wakun about Buddhist material which makes the Kukai's work the center

研究代表者
山本　秀人（YAMAMOTO, hideto）

高知大学・教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門・教授

研究者番号：３０２００８３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：『三教指帰注抄』(高野山大学図書館：金剛三昧院蔵)等の『三教指帰』の注釈書の原本調査を継続的に実施した。その複雑な加点状況が明らかになるに及び、翻刻を公表するにはなお確認が必要であるとの認識から、公表は後日を期することとした。また、東寺蔵『願文集』所収願文及び奈良国立博物館蔵『雑筆集』所収教化の文体分析を行い、さらに真言宗の、仁和寺蔵『三十帖冊子』の考察及び智積院、醍醐寺の実地調査によって訓読史研究資料の開拓を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本語学の、歴史的側面を考究する日本語史研究において、真言宗関係文献、特に弘法大師空海撰述書は、古来良質な資料群であることには気づかれていたが、進捗状況ははかばかしくなかった。研究成果の最初に掲げるべきことは、高野山大学、東寺、仁和寺、醍醐寺等の真言宗寺院に実地に赴いて、原本調査を実施し、本文データを集積したことにある。これによって、今後新たな日本語史研究の視野が広がってくることが期待される。

研究成果の概要（英文）：We did field research of valuable manuscripts. The texts Kobodaisi Kukai edited was handled in the center. Mainly, these are possessed in a Japanese Buddhist temple of Koyasan and Kyoto. We added　analyses from the philology-like viewpoint and described the relation between the Japanese reading and Japanese pronunciation, the style and the feature of the guiding marks for rendering Chinese into Japanese about these manuscripts.

研究分野：日本語学

キーワード：空海撰述書　仏書　漢文訓読　高野山　三教指帰　訓読　日本漢詩文

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

代表者の山本秀人は、「三教勘注抄における三教指帰と注との訓読について－宝寿院本と尊経閣本との比較を中心に－」（『築島裕博士古稀記念国語学論集』汲古書院、2005 年）、「高野山金剛三昧院蔵「三教指帰注抄」について一覚明注の成立に及ぶ」（『高知大国文』38、2007 年）等において、本研究課題の始発となる論考を公にしており、空海撰述書を中心とする仏教関連資料を対象とした、訓読と和訓に関わる研究に、日本語史の課題を見据え、この課題を推進する構想を得るに至った。これを遡って、基盤研究(B)「和歌山県所在真言宗寺院所蔵文献の国語史的研究」（平成 15～18 年度、課題番号：15320057）において研究代表者を務め、その経験に照らして、本研究課題の着想を得、発展的課題を見出したと位置づけることができよう。

分担者の山本真吾は、前述の基盤研究（B）の他、随心院、仁和寺等の近畿地方諸寺院の日本語史研究文献の現地調査を代表者とともに実施した経験を有し、その経験を活かして、本研究課題のうち、主として願文、表白といった仏教儀礼の日本漢文体の文献を軸として調査研究に従事することで本課題に参画することとなり、分担者宇都宮啓吾は、自身が代表者を務める、基盤研究(B)「真義真言宗聖教の形成と教学的交流に関する基礎的研究」（平成 29 年度～令和 3 年度、課題番号：17H02342）、また「多方面把握に基づく新義真言系聖教の解明と公開促進を果たす研究」（平成 26～28 年度、課題番号：26284065）を継続して実施しており、日本語史研究に限られない、歴史学、仏教学、文学、文献学等の文化史学全般を視野に入れた総合的研究の豊富な経験を活かすべく、本研究課題にも参画することとなった。

２．研究の目的

本研究の目的は、弘法大師空海の撰述書を、院政期以降に注釈、訓読した営為について、日本語史上の意義を解明するために、空海撰述書を軸としながらも、広く、真言宗の著述、訓読、注釈の言語活動を鳥瞰することを目指すものであり、代表者の着目した、本研究課題推進の文献基盤となる、高野山大学図書館所蔵「三教指帰注抄」（鎌倉写）について、精密な翻刻、注解作業を目標に据えつつ、関連の真言宗文献を調査し、日本語史的研究を行うものである。

３．研究の方法

本研究の方法の基幹は、原本調査を実地に行い、本文データの収集を日本語史研究に供することができるよう精密に行うことを旨とする。すでに翻刻（活字）データが公表されている文献も、日本語史研究の材料として用いる際には、漢字と仮名の別、仮名遣いや字の大小といった表記を原本通りにすることが求められる。次に重視した方針は、当該文献の成立・書写当時の文化的、歴史的、宗教史的背景に十分留意することが挙げられる。空海撰述書の注釈活動には、寺院における学問の交流、伝播のネットワークを考慮しなければ解けない問題が多々ある。以上の 2 点が本研究課題を推進する上で主たる方法として据えたものである。

４．研究成果

（１）高野山大学図書館所蔵の『三教指帰』注釈書の研究

代表者山本秀人を中心に取り組んでいる課題である。高野山大学図書館には、実地に 2016 年度、2018 年度の原本調査を実施している。当該文献群のうち、重点的に調査した『三教指帰注 抄』(金剛三昧院蔵)は、鎌倉時代の書写に係り、訓点も稠密に施されており、本研究の基軸に据えるべき日本語史研究上貴重な文献であることが認められた。これまでの調査で、訓点を含む本文の概要は把握できたが、日本語史研究に資する厳密な翻刻を公表するには再度の確認調査が必要であると判断された。

（２）東寺所蔵『願文集』所収願文の文体

東寺観智院金剛蔵第一六六箱は願文・嘆徳・表白を中心に収めるもので、願文文体史の貴重な文献資料である。本箱の文献中、最も注目に値するのは、「願文集　願文十三首　諷誦一首」（九号）で、書写は江戸時代まで下るが、そこに収録される願文は平安時代中期に製作されたと見られるものであり、平安時代後期以降に比して伝存数が少ない、当代の作品を補う貴重な資料であると考えられる。本『願文集』に 収録の文草を次に掲げる（＊印以外は、仮に付けた題）。

１、承平（九三一～九三七）年二月十一日右近大将藤原願文［三オ～四オ］
２、承平四（九三四）年七月八日覚意願文［五オ～五ウ］
３、天慶元（九三八）年十二月廿一日師輔願文（作者大江朝綱）［六オ～九オ］
　※九ウ白紙
４、天慶年（九三八～九四七）九月廿二日輔成願文［一〇オ～一一ウ］
５、天慶五（九四二）年八月八日伴氏亡室願文［一二オ～一三ウ］
６、天慶六（九四三）年正月廿九日左大臣正二位藤原氏願文［一四オ～一六ウ］
７、＊北宮奉為中宮五七日供養法服願文［一七オ～一九ウ］
８、天慶六（九四三）年四月十六日女弟子願文（作者大江朝綱）［一九ウ～二二オ］
９、天慶六（九四三）年十月十八日師輔願文（作者大江朝綱）［二二ウ～二六オ］

１０、天慶七（九四八～九四六）年九月九日春宮大夫願文（作者紀在昌）［二六オ～二八ウ］
１１、天慶八（九四五）年六月廿一日大法師願文［二九オ～三一ウ］
１２、＊天暦十（九五七）一年七月廿三日北宮御四十九日願文（作者文時）［三二オ～三三ウ］
１３、故内親王追悼願文［三四オ～三五オ］
１４、天禄元（九七〇）年十二月三日権中納言諷誦［三五ウ～三七オ］

本書収録の願文一三篇及び諷誦文一篇は、平安時代中期の九三一年～九七〇年に成った文草で、１や４など元号のみの記載の篇も含むが、概ね製作年次の古い順に配列していることが知られる。末尾の１４は製作年次も最も新しいが、願文ではなく諷誦文である点も最後に置かれた理由であろう。

作者は記載のない篇もあるが、大江朝綱、紀在昌、菅原文時などこの時期を代表する漢学者の草であることが窺われる。この一四篇の願文は、『本朝文粋』等の漢詩文集に収録されて伝えられてきた平安時代中期の三四篇の願文とは一致せず、従来知られていなかった、新出の願文を伝える点で貴重である。

まず、冒頭・末尾の表現形式に注目してみると、次のとおりである。

冒頭　　末尾
１、「孤子」…「孤子帰命稽首、敬白」
２、「右」…「敬白」
３、「弟子」…「此恨綿々、不可具説」
４、「偏子」…「（乃至法界同以利益、敬白」
５、「弟子、敬白」…「敬白」
６、「右」…「弟子、稽首和南、敬白」
７、「右、女弟子」…「敬白」
８、「女弟子、敬白」…「敬白」
９、「弟子」…「弟子ム、敬白」
１０、「蓋聞」…「敬白」
１１、「弟子」…「敬白」
１２、「右」…「敬白」
１３、「敬白」…「敬白」
１４、「弟子、敬白」…「敬白」

平安時代中期の様相を呈しているが、冒頭を「敬白」で始める形式は十一世紀（平安時代後期））以降に見られる形式であり、このように後世の形式もまま見られる。また、「右」で始まる形式は、その前に「奉（仏経）」を置くことが想定されるが、願文集に収録する際に省略に従った可能性がある。

次に、対句表現の句法に着目してみると、単句対では、五字以上の対句による長句が最もよく用いられ、次いで四字句の対である緊句がよく使用される。この長句では六字の対によるものが最もよく用いられる。十字以上の長文の句はほとんど使用されないことが知られる。このように単句対において､緊句と六字長句が優勢であって､四字と六字の句が好んで用いられていることが分かる。隔句対では、上四字、下六字の句による軽隔句の使用度数が最も高いことが分かる。観智院本「作文大躰」（天理図書館蔵）は、この軽隔句を相対的に優れた句と位置づけている。

平安時代中期の願文の対句の句法は、四字・六字の句の使用度数の高い傾向にあることを指摘したことがあるが、本『願文集』所収の諸篇についても、この時期の願文全般のそれに沿うものである。

平安時代中期の願文は、これまで三四篇しか知られておらず、初期五八篇、後期三五篇、院政期一二六篇に比して伝存数が少なかった。本『願文集』の出現によって、その不足を補うことができ、より実態が正確に把握できるようになったことは有意義であろう。

以上のことから、本書所収願文は弘法大師空海作の、『性霊集』所収願文の次の時代を担う願文資料として有用であることが判明した。

（３）『雑筆集』所収の教化の文体

奈良国立博物館所蔵『雑筆集』はやはり空海ゆかりの真言宗関係の表白類を収録したものである。そのうち、教化は漢字片仮名交じり文で表記されている。ここにその文体的特徴として明かになった点をまとめる。

①教化の表記

［１］語順が日本語式である。
［２］片仮名は右寄せ小書き及び割書を原則とする。
［３］返読する場合の送り仮名の位置（倒置記法）が、返読する字の下の漢字に添えられる。
［４］仮名書される自立語を含み、まま漢字と同じ大きさで書かれる。

以上の［1］～［4］の特徴は、上代以来の宣命体の表記形式と共通するところである。
築島裕博士は、平安時代の漢字仮名交り文の起源として、成立過程の上から次のように類別していられる。
（一）訓点本への書入れの類
（二）宣命書の変容
（三）変体漢文中の仮名表記の発達
（四）（一）（二）を併せた片仮名宣命書の確立
（五）平仮名文から片仮名交り文への書替え
このうち、（四）は、「先ず、訓点記入の方式の模倣によって生じ、時代が下って、片仮名が社会的勢力を獲得するに及び、宣命体の中の万葉仮名や平仮名の部分を片仮名に差替えた形で」発達して行くと説かれるものである。教化における、右の［1］～［4］の諸特徴は、この（四）の流れに属することを物語っている。
この片仮名宣命書は、鈴鹿本『今昔物語集』（鎌倉時代中期写）が著名であり、金沢文庫本仏教説話集（保延七年写）もこの表記体を採ることが知られている。
さらに、本書の教化について、表記の面からは次のような特徴を見出すことができる。
［5］自立語相当の漢字の読みに当該自立語訓に補助動詞、助動詞を含めて送ることがある（辞の部分表記）。
［6］当該漢字の読みを振り仮名ではなく、送り仮名のように漢字の直下右寄せ小書きしている例（全訓送り仮名）がある。
［7］漢字の右傍に振り仮名を付す。
［8］万葉仮名を用いている箇所がある。
［9］声点の差されている例がある。
［10］誤写と見られる箇所がる。

②、教化の語彙・語法
築島裕博士は、教化の語彙・語法上の特徴について、 係り結びの表現を用いることと助動詞「ケリ」を用いることの著しいことを指摘される。又、「…テ然ラバ」「…ベキモノナリケリ」の類型的表現の多用されることにも注意されている。
この教化の語彙・語法上の特徴は、『高山寺本表白集』のみに認められるのではなく、『雑筆集』の教化全体に通じるものである。
［1］係り結びの表現を用いる。
ゾやコソの強意による結びが目立つ。
【ゾによる係り結び】
②渇仰ノ腕ヲ合セテソ、仏頂ノ功徳ヲハ祈リ給ケル
③孔雀ノ誓願テソ、定恵ノ翅ニハ祈給ケル
【コソによる係り結び】
①…実リ無可物コソアリケレ
④…西天ノ教法ニ東寺ニコソ弘マリケレ
［2］助動詞「ケリ」を用いる。
詠嘆表現としてのケリ止めが多用される。
①…法皇久持金峯日月ノ実ニ廻ム限ハ共即体実リ無可物コソアリケレ
②…玉体ニ恙无ナク照シ奉リテ、万歳持給ヘキ物ナリケリ
［3］類型的表現「…テ然ラバ」が見られる。
⑧寺ヲハ石山トニ、松ノ齢ヲソ祈リ給ケル
千歳堅ク殖置テ然ハ、子葉モ栄給ヘキ物ナリケリ
［4］類型的表現「…ベキモノナリケリ」が見られる。
⑦万歳ノ命移テ植給ヘキモノナリケリ
⑫六情ノ霞皆消テ、五部ノ月顕ヘキモノナリケリ
［5］類型的表現「ノミカハ」が見られる。
⑯一人百僚皆共ニ、我国平ナラムノミカハ
⑲一人百官皆共ニ、我国平ナラムノミカハ
［6］訓点資料には必ずしも一般的でない助動詞が使用される。
『源氏物語』や『枕草子』といった王朝仮名文学作品にはよく用いられるが、訓点資料には原則として用いられない助動詞が、教化にはしばしば見られる。
【ラム（現在推量）】

⑩善ー根ノ果(平)実(入濁)只今、結置ツト照シ納メ給ラム
⑬三業ノ霜積トモ、戒行ノ光ニハ消ヌラム

【ケム（過去推量）】

⑥発光ノ大士去ケム

【メリ（推量）】

⑬峯ノ樹滋シケレトモ、秋来ヌレハ透スキヌメリ

【ナリ（伝聞・推定）】

⑫三輪ノ宗ヲ極ソ、両界ノ教ヲハ伝給ナル
⑬谷ノ氷リ深ケレトモ、春ニ入ヌレハ解ナリ

［7］変体漢文の語法と共通するものが見られる。

⑨孔雀ノ翼太ニ弘ケレハ、天変ヲ扇キ散ニ自在ナリケリ
百年ノ宝算ヲ護給テ、玉体平ケリ令持給ヘキモノナリケリ

右の「令～給（しめたまふ）」は玉体に対する敬意で、二重尊敬と見られる語法である。これは変体漢文に特徴的な語法であると説かれている。

以上、教化の文体特徴として肝要と思われる点について、箇条的に整理し、記述してきた。こういった諸特徴は、鈴鹿本『今昔物語集』の片仮名宣命書に共通する部分も多く、注目に値する。また、既に知られている教化の文体にも同様の特徴を指摘することができるようである。

（4）仁和寺蔵『三十帖冊子』の角点について

この度、仁和寺蔵『三十帖冊子』の訓点、角点（一般的な角点と異なり、料紙を針穴で貫通させていることから「刺穴点」と呼称する）・ヲコト点について、詳細に調査を行うことが叶い、その調査結果から新たに得られた知見を、第2回　日本宗教文献調査学　合同研究集会「宗教文化遺産の未来のためにー宗教文献の保存と修復」（2018年10月6日(土)）の第1パネルのシンポジウムにおいて、報告した。その際の配付資料の要旨として以下の如く示す。（尚、このシンポジウムの成果は、仁和寺御当局のご許可のもと、論文集の刊行も予定されている。）

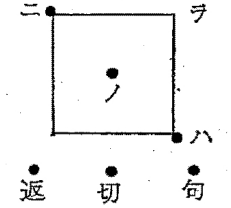
本発表では、「三十帖冊子」における刺穴点の存在から、新たに浮かび上がってきた点について述べてみた。その大略を纏めるならば、以下の如くである。

①「三十帖冊子」の刺穴点の存在と奈良写経における刺穴点の存在から、刺穴点が訓読における原初的な加点と考えられる。
②そして、筆に基づく加点ではないが、奈良時代においても経典訓読が実際に行なわれていたと考えられる。
③刺穴点は原初的な様式であるため、平安時代に入ると使用されなくなるが、宇多法皇周辺において使用が認められる。それは、「三十帖冊子」を天覧した宇多法皇がそこに付けられた刺穴点に倣ったものと考えられる。

この宇多天皇の天覧については、次の如く勝又俊教氏が指摘している（勝又俊教「三十帖策子」（佐和隆研・中田勇次郎編『弘法大師真蹟集成』解説　法蔵館　一九七四））。

朝廷に進上した分とは別に手元においておくために空海自ら書写した冊子本は東寺に所蔵されていたが、貞観十八年（八七六）六月、高野山真然が東寺長者の真雅から借り受け、その後、東寺側の度重なる返還要請にも関わらず、真然からその弟子である寿長（初代金剛峯寺座主）、無空（第二代座主）へと伝えられた。そして、延喜十六年（九一六）六月二十六日に無空が死去した後、東寺長者観賢が、冊子を返還しない無空の弟子らへの対抗措置として、寛平法皇に事の次第を奏上するに至り、法皇の譴責を受けた無空の弟子らによって、冊子は東寺に返還され、延喜十八年三月には、観賢によって冊子が寛平法皇の天覧に供されることとなった。そして、翌十九年十一月、冊子を永く東寺経蔵に安置し東寺一長者に守護させる旨の勅命が下されている。

こういった経緯の中で、実際に寛平法皇はこの刺穴点の施された『三十帖冊子』を天覧していることが確認できる。また、第二十八帖『阿唎多羅陀羅尼阿嚕力品』には、平安時代中期十世紀初期頃を降らない白点によるヲコト点が、右図の如き第五群点の形式で付けられている。この点について、築島氏は、「本點は、仁和寺邊の僧侶の加點に成る可能性が大きいかと思われる」との見解を示している(築島裕「三十帖策子古訓點所見」（『弘法大師真蹟集成』解説　一九七四））。



点図集にその名の見える第五群点の最初のヲコト点である乙点図については、宇多法皇周辺において、天台宗延暦寺所用のヲコト点（四隅が左下から時計回りに「テヲニハ」）を改変（「ニ・ヲ」の位置を入れ替える）して創始されたことを宇都宮が指摘したことがある(宇都宮啓吾「乙点図再考ー乙点図の創始と漢籍訓読とを巡ってー」（『訓点語と訓点資料』一三〇輯　二〇ー二・三））。そして、延喜十九年（九一九）には「東寺経蔵に安置し東寺一長者に守護」せられた「三十帖冊子」が仁和寺邊で第五群点のヲコト点を付けることができる時期としては、この宇多法皇の天覧の時期に限られることとなる。即ち、この時期に仁和寺、宇多法皇周辺で「三十帖冊子」の訓読の行なわれていたことが実際に確認できる。

つまり、宇多法皇当時には、他に類似の加点（刺穴点による加点）が見出されず、また、先述のようにこの形式は既に存在意義を失っていたにも関わらず、宇多法皇周辺で刺穴点が再登場した理由としては、「三十帖冊子」の刺穴点に倣って行なわれたものと考えることが、最も妥当性が高いものと思われる。

④第五群点資料、特に紀伝道の側で加点された資料に宇多法皇周辺と類似した加点（刺穴点の如き小さな針穴による加点）が認められ、これは、紀伝道の博士家が宇多法皇周辺の乙点図資料に倣う形で古紀伝点を創始した結果と考えられる。

以上、この度の「三十帖冊子」修復における刺穴点の発見が、奈良時代に於ける訓読の存在や宇多法皇周辺と漢籍訓読との関係を浮かび上がらせるものとなった。また、「三十帖冊子」が宇多法皇周辺と繋がることで、漢文訓読史の上でも漢籍訓読や加点様式の点で大きな影響を及ぼしていたことが知られた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計５件）

①宇都宮啓吾、法明院（甲本）『二十五三昧式』について、大津市歴史博物館研究紀要、23、25-32、査読無、2019

②山本真吾、東寺蔵『願文集』所収願文の文体について、歴史言語学の射程、119-132、査読無、2018

③田中勝、村川猛彦、宇都宮啓吾、訓点資料を対象とした翻刻支援システムの構築、情報処理学会論文誌、59-2、288-298、査読有、2018

④宇都宮啓吾、智積院蔵『秘蔵宝鑰抄巻下』について、智山学報、66、169-182、査読有、2017

⑤山本真吾、寺院経蔵の聖教類と文学作品をつなぐ言葉と文体、仏教文学、42、95-106、査読有、2017

〔学会発表〕（計４件）

①宇都宮啓吾、「三十帖冊子」と宇多法皇周辺―訓点資料研究の視点から、第３回日本宗教文献調査学合同研究集会、2018

②山本真吾、*Ganmon* Liturgies in Premodern East Asia；keynote lecture、Workshop（コロンビア大学）、2018

③宇都宮啓吾、聖教とデジタルアーカイブス、第２回日本宗教文献調査学会合同研究集会、2017

④宇都宮啓吾、和泉国家原寺聖教の形成に関する一考察、日本密教学会第49回学術大会、高野山金剛峯寺、2016

〔図書〕（計２件）

①東国大学校・大津市歴史博物館編（宇都宮啓吾共著）、西教寺所蔵円測撰無量義経疏、196、東国大学校（大韓民国）、2018

②奥田勲、月本雅幸、肥爪周二、山本真吾、大東急記念文庫善本叢刊中古中世篇『伝記・願文・語学等』、800、汲古書院、2016

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名： 宇都宮　啓吾
ローマ字氏名： （UTSUNOMIYA,keigo）
所属研究機関名： 大阪大谷大学
部局名： 文学部
職名： 教授
研究者番号（８桁）：40257902

研究分担者氏名： 山本 真吾
ローマ字氏名： （YAMAMOTO,shingo）
所属研究機関名： 東京女子大学
部局名： 現代教養学部
職名： 教授
研究者番号（８桁）：70210531